

R-04

環境“保全”の担保は何か——カミという民主主義

嶋田 奈穂子（地球研センター研究推進員）

環境保全というテーマにおいて、民主主義の「民」とは誰か、環境保全のルールを作って守る「みんな」とは誰か、ということを考えてと思います。

この環境保全のルールなんですが、レベルは様々です。国際レベル、国家レベル、それから、自分たちの住まう小さなコミュニティーのレベルがあるんですね。国際レベルとか国家レベルでは、だいたい、ルールの設定は有識者が来たり、行政、官僚が来たりしてやるんですが、では小さな集落で、ルールってというのはどうやって決められるのか。誰がどうやって守るのか。ペナルティーは何なのか、ということをちょっと考えてと思います。

私、神社の研究をしてるんです。神社ってその縁結びとか、合格祈願のためにもあるんですが、実はそこでは様々な、村の取り決めが行われている場所です。有識者はその小さなコミュニティーではなかなかいないんですが、リーダーになる存在はいて、それはやっぱりカミサマではないか、ということが色んな事例から見えてきました。

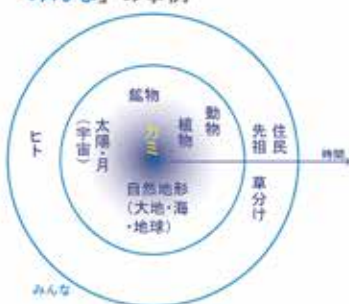
例えば、このアラスカのトリンギット族は、リーダーは自分たちの先祖です。先祖ってのはだいたい動物であることが多いです。例えば、自分たちの先祖はオオカミだと。で、そのオオカミは、かつてカラスに命を助けられたことがあるので、その子孫である自分たちは絶対にカラスを傷つけてはいけません。そのカラスが巣を作る木を切ってはいけません、というふうですね、ルールを決めて守っています。

皆さんのお住いの地域でも、ルールを守るのは、作るのは人間だけかと思いきや、実はそうではないんじゃないか、ということも考えていただければ、思い起こしていただければと思います。

日本の神社に代表される地域コミュニティの聖地研究を進めていると、地域コミュニティには、地域内のさまざまな事象について聖地を核にした独自のルールがあることがわかる。そのルールは、日本「カミ」に当たる存在が中心となって規定され、守られてきた。家庭内や村内の出来事、村の自然環境の利用などは「カミ」に相談し、その可否が決められ、報告される。ただしその「カミ」の姿は多様で、動物であったり真民族であったり、直系の祖先であったりするし、唯一無二のものではなくいくつもの「カミ」がいる場合もある。つまりルールを定め、会話し、守る「みんな」とは人間だけを指していない。

動植物、祖先の記憶・物語など、村を形成してきたいくつもの要素で「みんな」は構成されている。そして「みんな」がそのルールを守る担保は、「カミ」が当てる「バチ」である。このような「民主主義」の在り方を、環境問題において考えてみたい。

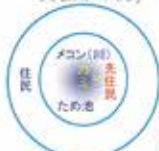
「みんな」の事例



環境“保全”の担保は何か 一歩もという民主主義

総合地球環境学研究所 織田 京子

ラオス(チャンバウック族ラオ族)の「みんな」



メディア: ナンティナム(遺跡)
場所: 陸奥の森

2011年、陸奥の森(宮城県)を訪れたとき、私は「カミ」の存在を知り、その聖地を核とした独自のルールがあることがわかった。そのルールは、日本「カミ」に当たる存在が中心となって規定され、守られてきた。家庭内や村内の出来事、村の自然環境の利用などは「カミ」に相談し、その可否が決められ、報告される。ただしその「カミ」の姿は多様で、動物であったり真民族であったり、直系の祖先であったりするし、唯一無二のものではなくいくつもの「カミ」がいる場合もある。つまりルールを定め、会話し、守る「みんな」とは人間だけを指していない。



写真: チャンバウック族の「カミ」(動物)の聖地(宮城県)を訪れたとき(織田京子)